富美文庫蔵「徒然草」考

―挿絵の比較を中心に―

塩出　貴美子*

要　旨

本稿で取り上げる富美文庫蔵「徒然草」五冊は、筆者が二〇〇九年三月に紹介した新出の奈良絵本である。烏丸本系の本文を持ち、挿絵は各冊に十五図ずつ、合計七十五図ある。これは現在知られている奈良絵本「徒然草」のなかでは、蓬左文庫所蔵本に次ぐ多さである。本稿では、まず本作品の概要を紹介する。次いで、その挿絵を慶安五年（一六五二）に出版された「徒然草」の注釈書である「なぐさみ草」、蓬左文庫所蔵本、及び二〇〇六年に有吉保氏によって紹介された奈良絵本と比較する。これにより、これら四作品の中では「なぐさみ草」の図様に最も先行性が認められること、他の三作品はいずれも「なぐさみ草」を典拠とすること、ただし互いに独自性を有していることから、これら三作品の間には直接的な転写関係は想定し得ないことなどを明らかにする。また、それぞれの作品の特質についても若干の指摘をする。

はじめに

吉田兼好の随筆として名高い「徒然草」は、江戸時代になると版本が刊行され、また注釈書も書かれ、広く流布するようになる。次第に絵画化も行われるようになり、冊子、絵巻、色紙、屏風など多彩な作品が制作されるが、そこで注目されるのが慶安五年（一六五二）に刊行された注釈書の「なぐさみ草」である。[1] これには一五七図もの挿絵が加えられており、それが版本は勿論のこと、その後の絵画作品に多大な影響を及ぼすことになるのである。特に奈良絵本と通称される冊子本の挿絵は、この「なぐさみ草」と密接な関係にあることが指摘されている。[2] 本稿で取り上げる富美文庫蔵「徒然草」（以下、富美文庫本と称する）は、そうした奈良絵本の新たな一例となるものである。[3] ここでは、この富美文庫本の概要を紹介するとともに、その挿絵を「なぐさみ草」及び二件の奈良絵本と比較し、その関係及び特質を考察することにしたい。

2009年９月17日受理　*文学部文化財学科教授

一　富美文庫本の概要

（一）書誌

富美文庫本は、五冊からなる絵入りの写本である。その書誌は左記の通りである。

［形　態］冊子　五冊
［装　丁］綴葉装
［法　量］各　縦二六・五センチ　横二〇・〇センチ
［表　紙］薄茶地金襴
［外　題］「つれ〳〵草　壱（弐、三、四、五）」
［見　返］金箔押
［内　題］なし
［料　紙］三十七・四十・四十・四十七・四十四丁
［奥　書］なし
［付属品］箱、布、紐、メモ

奈良絵本には装丁を四目綴とし、表紙を紺紙金泥絵とするものが多いが、富美文庫本は表紙に金襴地を用いた綴葉装である。法量は通常の縦本よりやや大きく、大型本との中間くらいの大きさである。表紙の中央に、金泥の霞を引き、さらに金砂子を撒いた題箋が貼付されており、「つれ〳〵草　壱（～五）」と記されている。なお、巻数を示す数字は右下に寄せて、やや小さく書かれている。見返しは布目の金箔押しである。内題及び奥書は当初からない。

料紙の枚数は右に記した通りである。各冊とも第一丁は遊び紙とし、最終丁については、第一冊と第三冊は裏面のみを、第二冊、第四冊及び第五冊は表裏面とも白紙とする。本文の料紙には、この白紙も含めて全頁に金泥による装飾下絵が施されている。松葉、紅葉、草花、蝶、波などをモチーフ化して散らしたもので、いずれも略画的に描かれている。本文は各冊とも第二丁表から十行取で書写されている。挿絵は各冊に十五図ずつ、合計七十五図あり、すべて半丁で完結する。

付属品の箱は素木の桐製で、印籠蓋造である。身の短側面に「和田家所蔵」と欄外下に印刷された旧蔵者の貼紙があり、墨で「い」「徒々草」、朱で「（第）一壱四（號）」（括弧内は印刷）と書かれている。ただし「一」は墨書の上に朱を重ねており、本来は「壱四號」である。このことは反対側面にボールペンで「14徒然草」と横書きしたメモが貼られていることからも確かめられる。その左横と蓋表の右下には「6367」とペン書した貼紙があるが、これはその後の購入者によるものである。布は白地の絹で、この五冊を包むものである。紐は箱用で、現在のものに取り替える前に使用されていたものである。メモは先述の「6367」の貼紙と同筆で、便箋一枚に購入時の覚え書きを記したものである。その内容は左記の通りである。

「奈良画本つれ〳〵草　昭和卅年秋に四國行旅費の残りで購入　弘文荘目録才廿五号　五冊　三万三千円　同書の解説に次の如く記す（後略）」

富美文庫の絵入本及び絵巻には弘文荘を経由したものが多いが、こ

のメモにより「徒然草」もその一つであったことがわかる。[4]『弘文荘待賈古書目』第二十五号（昭和三十年十一月発行）を見ると、この「徒然草」は見開きの写真付きで掲載されており、次のように記されている。[5]

「二六　つれ〳〵草　寛文元禄頃寫　奈良繪本

五冊　三三、〇〇〇圓

特大本（二六、六×二〇、〇糎）、草花の金泥略畫ある鳥の子紙、大和綴、十行。繪は各冊十五面づつ、すべて七十五の多きに達す。薄茶地に金線で文様を織り出した古金襴の表紙の中央に「つれ〳〵草（卷數の數字）」の美しい題簽。極上保存。古き桐箱入。

濃彩（金・茶・丹・祿を主色とす）、華麗ながら、さまであくどからぬ、奈良繪本らしい奈良繪本。裝釘も似つかはしい美裝である。殊に本の形大きく、挿絵の數多い點が珍重に値する。」

掲載写真は左頁が「序つれづれ」の挿絵の部分であり、正しく富美文庫本のものである。右の解説の内容も富美文庫本の現状に合致しており、特に問題となるところはない。強いて言えば、法量の縦が一ミリ異なるが、これは許容誤差の範囲内であろう。なお、先述のメモの省略部分には右の解説文が書写されている。メモには「昭和卅年秋」とあるから、古書目の発行直後に購入したのであろう。

（二）本文と挿絵

富美文庫本の本文は、江戸時代に最も流布した烏丸本系であり、全文を書写している。多少の脱文や異同はあるが、その点については省略する。第一冊は「序つれづれ」（以下、章段は番号と冒頭の四文字以内で表す）から「43春のくれ」まで、第二冊は「44あやしの」から「91赤舌目」まで、第三冊は「92ある人弓」から「136くすし」まで、第四冊は「137花は盛り」から「188ある者」まで、そして第五冊は「189今日は」から「243八に」までを収載する。なお第四冊には錯簡があり、第二十丁は第二十二丁に続き、その間の第二十一丁は第四十六丁の後に続く。第四十七丁は表裏とも白紙であるので、第四冊は現状の第二十一丁裏で終わることになるが、この頁は末尾の十行目まで本文が書かれているので、見た目には錯簡であることがわかりにくくなっている。

本文の筆写は各段ごとに行が改められている。ただし「204犯人を」と「232すべて人は」の二段は改行しないまま前段に続いており、改行を忘れたものと推測される。挿絵は一段分の本文が終わったところに挿入されるが、「13ひとり燈」は「19おりふし」の本文の六月と七月の間に挿入されている。また「231園の別当」は「238御随身」の本文の自讃七箇条のうちの一箇条目の後に、「237やないはこ」は同じく六箇条目の後に挿入されている。これらは段の区切りを見誤ったものかもしれない。なお、挿絵の前に余白ができる場合は、それに合わせて本文は散らし書きにされている。

ところで、右のことからもわかるように、本文と挿絵の位置はずれており、大抵は挿絵が遅れがちである。逆に挿絵が先行するのは「41五月五日」と「44公世の」の二段だけであり、ちょうど本文の前の頁に挿絵が描かれているが、これもずれていることにはかわりがない。本文と挿絵のこのような状態は、挿絵の効果を減損するものであり、できれば避けたいことのはずである。しかし、富美文庫本はこの点には全く無頓着である。なお「48光親卿」と「195或人久我」の二段は、珍しく本文の次の頁に挿絵が描かれているが、これは意図的というよりも、むしろ偶然の結果であったように思われる。

二「徒然草」の絵画作品

(一) 絵画作品の概要

ここでは、個々の作品への言及は控え、それらを総括的に紹介したものを数点だけ掲げておくことにしたい。

「徒然草」を絵画化した作品をまとめたものとしては、一九九四年に神奈川県立金沢文庫で開催された「兼好と徒然草」の図録が有用である。[6] 同書には奈良絵本、画帖、絵巻、屏風、版本などの多数の作品が掲載され、中野雅之氏ほかの論考が収録されている。「なぐさみ草」の全挿絵についての場面解説も付されている。また、絵入りの版本については、齋藤彰氏による十三回に及ぶ連載があるが、その間、図版が一枚も掲載されていないのが大変残念である。[7]「なぐさみ草」は初回に取り上げられており、全挿絵について本文との関連性が略述されている。さらに、近年は島内裕子氏が絵巻、屏風、画帖、色紙などの作品を整理し、数点の作品について精力的な研究を展開している。[8]

奈良絵本については、有吉保氏が二〇〇六年に美麗な六冊本の影印をフルカラーで出版された（以下、有吉本と称する）。[9] その解説によれば、冊子本の「徒然草」でこれまでに知られているのは、蓬左文庫蔵本六冊、高乗勲蔵本四冊、東京国立博物館蔵本、金沢文庫蔵本十二図（零本）、専修大学図書館蔵本三冊、東洋大学図書館蔵本五冊、スペンサーコレクション蔵本六冊、『弘文荘待賈古書目録索引』掲載本五冊、『思文閣古書資料目録第一三四号』掲載本三冊、『日本書籍協会創立40周年記念目録・臨川書房目録』掲載本二冊、有吉保蔵本六冊、及び有吉保蔵本二冊（零本）、以上十二件である。なお、このうちの『弘文荘待賈古書目録索引』掲載本五冊が富美文庫本に該当するものと思われる。このほか、管見の及ぶ限りでは、実践女子大学図書館蔵本三冊、[10] 工藤早弓著「奈良絵本・下」所収本五冊、[11] 及び青山短期大学蔵「徒然草貼交屏風」[12] がある。筆者が確認し得たのは、このうちの数本に過ぎないが、大概は「なぐさみ草」の図様と同系統である。ただし、工藤氏が紹介された三冊本は「なぐさみ草」とは全く別の図様を描いており、このような作品もあることが興味深い。

(二) 挿絵の出入

本稿では、富美文庫本の比較対象として、「なぐさみ草」、及び右の

奈良絵本諸本のうち蓬左文庫本と有吉本を取り上げる。「なぐさみ草」は「はじめに」で述べたように「徒然草」の注釈書であり、慶安五年（一六五二）に刊行された。蓬左文庫本は、尾張藩三代藩主徳川綱誠（一六五二―一六九九）の正室新君（瑩珠院、一六五四―九二）の蔵書として伝来したものであるが、制作時期は不明である。[13] 有吉本については現所蔵者名も伝来も明かされていない。

さて「なぐさみ草」には一五七図、蓬左文庫本には一四二図、富美文庫本には七十五図、そして有吉本には四十八図の挿絵がある。表1はその出入を一覧表にしたものである。各作品欄の数字は作品ごとに付した挿絵の通し番号であり、図版キャプションの末尾の数字はこれに対応する。なお有吉本には見開き二頁を使った通し絵が六図あり、その番号には丸を付した。

表1の出入関係をまとめたものが表2である。富美文庫本を中心に見ると、他三本のすべてと共通するのは七十五図のうち二十九図である（表3）。また「なぐさみ草」及び蓬左文庫本と共通するものが四十図（表4）、「なぐさみ草」とのみ共通するものが六図（表5）あり、これ以外の組合わせは存在しない。なお、富美文庫本以外の三者が共通する段は十八あるが、蓬左文庫本以外の三者が共通する段は存在しない。これは「なぐさみ草」と蓬左文庫本の挿絵数の差が十五段と少ないためと思われる。

ところで、表2では「なぐさみ草」が他三本の全てを包括している点が注目される。このような場合、少ないものを集成して多いものが作られるという考え方と、多いものから少ないものが派生するという考え方が可能であろう。この点について、中野氏は前者の立場をとり、「質量ともに極めて完成度の高い『なぐさみ草』の挿絵が、最初期の段階で突然登場するとは考えにくい。おそらく先行する奈良絵本徒然草の画面を手本として『なぐさみ草』の挿絵が描かれたのではないだろうか。」と考え、「蓬左文庫所蔵本→実践女子大学本・金沢文庫所蔵本→『なぐさみ草』という関係が成立する可能性」を指摘された。[14] 一方、齋藤氏は後者の立場をとり、「『なぐさみ草』の挿絵は、絵入り版本の最初で、奈良絵本『徒然草』の原拠となる」と述べている。[15] 本稿では実践女子大学本及び金沢文庫所蔵本は比較の対象としないが、かわりにそれらよりも挿絵数の多い富美文庫本と有吉本を加え、この問題を図様の面から検討することにしたい。

三　挿絵の比較

ここでは、富美文庫本の挿絵七十五図を「なぐさみ草」、蓬左文庫本、有吉本の挿絵と比較し、その関係を考察する。ただし紙数の都合上、全段に言及する余裕はないので、本文では適宜選択した段についてのみ述べることとし、全段については主な異同を一覧表にまとめることとする（表3～5）。なお、そこで挙げた異同は構図に関わる顕著なものだけであり、装束の色や文様、画中画の内容などについては省略した。

144	栂の尾の	107	97	52	30
149	鹿茸を	108	98		
152	西大寺	109	99	53	
153	為兼	110	100		㉛
154	此人東寺	111	101		
158	盃の底を	112	102		
159	みな結び	113	103		32
162	遍照寺の	114	104	54	33
171	貝を	115	105	55	㉞
173	小野小町	116	106	56	35
175	世には	117	107	57	36
176	黒戸は	118	108		
177	鎌倉	119	109		37
180	さぎちゃう	120	110	58	
181	ふれふれ	121	111	59	38
183	人つく牛	122	112	60	
184	相模守	123	113		
185	城陸奥守	124	114		
188	ある者	125	115	61	
190	妻といふ	126	116		39
191	夜に入て	127	117	62	
192	神仏にも	128	118		
195	ある人	129	119	63	40
196	東大寺の	130	120		41
200	呉竹は	131	121		
203	勅勘の所	132		64	
206	徳大寺	133	122	65	42
207	亀山殿	134	123		
209	人の田を	135	124	66	
212	秋の月は	136			
213	御前の	137	125		㊸
214	想夫恋	138	126	67	
215	平宣時	139	127		
216	最明寺	140	128	68	
218	狐は人に	141	129	69	44
220	何事も	142	130		
221	健治弘安	143		70	
224	陰陽師	144	131		
225	多久資が	145	132	71	45
227	六時礼讃	146	133	72	
228	千本の	147	134		
230	五条内裏	148			46
231	園の別当	149	135	73	
232	すべて人	150	136		
235	主ある家	151			
236	丹波に	152	137		47
237	やない箱	153	138	74	
238	御随身	154	139		
240	しのぶの	155	140	75	48
241	望月の	156	141		
243	八に	157	142		
挿図の数		157	142	75	48

・各作品の欄の数字は作品毎に付した挿絵の通し番号。
・有吉本の丸数字は通し絵（6枚）。

表２　出入の組合結果

な	蓬	富	有	29
な	蓬	富	－	40
な	－	富	－	6
な	蓬	－	有	18
な	蓬	－		55
な	－	－	有	1
な	－	－	－	8
157	142	75	48	

な＝「なぐさみ草」　蓬＝蓬左文庫本
富＝富美文庫本　有＝有吉本
右欄の数字は各組合の挿絵数。
下欄の数字は各作品の挿絵の総数。

（一）四本共通の段

富美文庫本の挿絵七十五図のうち「なぐさみ草」、蓬左文庫本、有吉本の三本すべてと共通するものは二十九図である（表3）。その中から、まず「序つれづれ」「18人は」「41五月五日」「53是も」の四段を見てみよう。

「序つれづれ」は、兼好が草庵で「硯に向か」う場面を描いている（図1～4）。四本とも一見よく似た図様であるが、細部にはそれぞれ微妙な異同がある。兼好については、蓬左文庫本は筆を止めて前方を眺めるような姿であるが、他三本では筆を走らせており、前者は「心にうつりゆくよしなしごと」に思いをめぐらせる場面、後者はそれを「そこはかなとなく書き付」ける場面と見なされる。本文は短いが、そこからどの部分を絵画化するかという点に明らかな相違があるのがわかる。なお、机の上に広げられた料紙は「なぐさみ草」では白紙であるが、他三本では文字を示す点々が打たれている。草庵の描写は「なぐさみ草」と蓬左文庫本が最もよく相似し、有吉本は構造は似ているが、屋根の位置が高くなり、後方の白壁まで見渡せるようになっている。兼好が座る位置も少し後方にずれている。以上三図の草庵は斜投影法的

表１　「徒然草」挿絵の出入一覧

章段	本文冒頭	なぐさみ草	蓬左文庫本	富美文庫本	有吉本
序	つれづれ	1	1	1	1
1	いでや	2	2		②
2	いにしへ	3	3	2	
3	よろづに	4	4		
4	後の世の	5		3	
5	不幸に	6	5		3
6	我身の	7	6	4	
7	あだし野	8			
8	世の人の	9	7	5	4
9	女は髪の	10	8		
10	家居の	11	9		
11	神無月の	12	10	6	
12	同じ心	13	11		5
13	ひとり灯	14		7	
14	和歌こそ	15	12	8	
15	いづくに	16	13		
16	神楽こそ	17			
17	山寺に	18			
18	人は	19	14	9	6
19-1	折節の	20	15	10	
19-2	折節の	21	16		
20	なにがし	22	17		
21	よろづの	23	18		
22	何事も	24	19	11	7
23	おとろへ	25	20	12	
24	斎宮の	26	21		
25	あすか川	27	22		
26	風も	28			
27	御国譲り	29	23	13	
29	静かに	30	24		
30	人の亡き	31	25		8
31	雪の	32	26		
32	九月廿日	33	27		
33	今の内裏	34	28	14	
34	甲香は	35	29		
36	久しく	36	30		9
37	朝夕	37	31		
38	名利に	38	32		
39	ある人	39	33		
40	因幡国に	40	34		
41	五月五日	41	35	15	⑩
42	唐橋中将	42	36		
43	春の	43	37		
44	あやしの	44	38		
45	公世の	45	39	16	11
47	ある人	46	40		
48	みつちか	47	41	17	
49	老きたり	48	42	18	
50	応長の比	49	43		12
51	亀山殿の	50	44	19	
52	仁和寺に	51	45	20	
53	是も	52	46	21	13
54	御室に	53	47	22	
59	大事を	54	48	23	14
60	真乗院に	55	49		
61	御産の時	56	50	24	
62	延政門院	57	51		
66	岡本関白	58	52	25	15
67	賀茂の	59	53	26	
68	筑紫に	60	54		
69	書写の	61	55	27	
70	元応の	62	56		16
72	賤しげ	63	57		
73	世に語り	64		28	
76	世の	65	58		17
79	何事にも	66		29	
80	人ごとに	67	59	30	
83	竹林院の	68			
84	法顕三蔵	69	60		
86	惟継	70	61	31	
87	下部に酒	71	62	32	⑱
89	奥山に	72	63		
90	大納言	73	64	33	19
92	ある人弓	74	65	34	
93	牛をうる	75	66	35	
94	常磐井	76	67		20
95	箱の	77	68	36	
96	めなもみ	78	69	37	
99	堀川相国	79	70	38	21
100	久我の	80	71		
101	ある人	81	72	39	
102	尹大納言	82	73	40	
103	大覚寺殿	83	74		
104	荒れたる	84	75		
105	北の屋陰	85	76	41	22
106	高野の	86	77	42	
107	女の	87	78		23
109	高名の	88	79	43	
111	囲碁双六	89	80		
114	今出川の	90	81	44	24
115	宿河原と	91	82		
117	友とする	92			
118	鯉の	93	83		25
119	鎌倉の海	94	84	45	
120	唐の物	95	85		
121	やしなひ	96	86	46	
124	是法法師	97	87	47	
128	雅房	99	89	48	26
129	顔回は	100	90		
134	高倉院の	101	91	49	27
135	資季の	102	92		
137	花は盛り	103	93	50	28
138	祭過ぎ	104	94		
139	家に	105	95		
141	悲田院	106	96	51	29

な表現で描かれているのに対し、富美文庫本のそれは不等測投影法的な表現で描かれており、それは山間から導かれる筧についても同様である（以下、投影法については「的な表現」を省略する）。また、兼好の右手側を壁で塞ぎ、屋根の全体を描き、逆に画面右下の柴垣を描かないのも富美文庫本だけである。外の風景については、「なぐさみ草」と富美文庫本は屋根の向こうに遠山を描くが、他二本では屋根の上方は霞で覆われており、草庵の近くに土坡を描くだけである。このように四本の関係は極めて複雑であり、それぞれが他本に対して独自性を持つ一方、「なぐさみ草」と蓬左文庫本、「なぐさみ草」と富美文庫本、あるいは蓬左文庫本と有吉本のそれぞれ二本にだけ共通性が認められる部分もある。

ところで「なぐさみ草」の画面の上下は、全段を通じて雲と霞で覆われている。この雲霞は画面の合間にも挿入され、この段でも見られるように遠景と中景あるいは近景を繋いだり、次の「18人は」のように画面を上下に区分する役割を担う場合もある。このような雲霞は嵯峨本「伊勢物語」などにも見られるもので、版本の表現上の特質の一つである。一方、他の三本では、この雲霞は大小の切箔や金砂子を撒いた霞に取って代わられるが、その形態は三者三様である。富美文庫本は大概は水平線の左右にすやり霞を付加したもので、これは奈良絵本に描かれる霞の最も基本的な形態である。蓬左文庫本はこれも用いるが、それよりも水平線の左右どちらか一方にだけすやり霞を付加したものを用いることが多く、最もシンプルである。逆に、有吉本は富美文庫本の形態を基本としながらも、図4の上部に見られるような入り組んだ形態のものを多用しており、他二本よりも装飾性が強くなる傾向がある。

次に、「18人は」は、雲あるいは霞で画面を上下に二分し、下に許由の、上に孫晨の故事を描いている（図5～8）。許由については、右手で川の水を掬おうとする姿は四本ともほぼ同じであるが、有吉本は地面が張り出し、水流が遠のいているため手が水に届いていない。許由の背後の木には、蓬左文庫本以外の三本では「なりひさご」がかけられている。この段は、人にもらった「なりひさご」を木の枝にかけておいたところ、風に吹かれて鳴るのが「かしがまし」いので捨ててしまったという話であり、「なりひさご」は画面を構成する重要なアイテムである。しかし「なりひさご」があれば手で水を掬うことはないから、これは矛盾した場面であり、強いて言うならば「なりひさご」がない時とある時を異時同図法的に合成した説明的な場面と言えるだろう。一方、これを描かない蓬左文庫本は、「なりひさご」をもらう前、あるいは捨てた後の場面と見なされ、合理的な構成ではあるが、故事画としては物足りなさが残るの否めない。つまり一見矛盾した構成である「なぐさみ草」以下三本の方が、故事画としてはわかりやすい場面になっているのである。蓬左文庫本が「なりひさご」を描かなかったのは、先述のような合理的な解釈によるものか、あるいは単純な書き落としであったのか、判断しがたいところである。

孫晨については、藁を敷いて伏す姿は四本ともよく似ているが、富

美文庫本は襟元に布を結んでいない点や小屋の壁の造りに異同が認められる。しかし、最も大きな異同は有吉本が紅葉を描いて秋を思わせるのに対し、他三本は雪景色を描いている点である。本文には「冬の月に」とあるので、これは明らかに有吉本の逸脱であり、先述の許由の右手とともに有吉本における独自の変容と見なしておきたい。なお「なぐさみ草」は版本であるため雪景色であることがわかりにくいが、樹木や山の周囲に残る黒い部分は、肉筆画の外隈の技法に準じたものであり、これで雪の白さを表している。この表現は「105北の屋陰」（図17）や「181ふれふれ」（図25）などにも見られるが、詳しくは「73世に語り」（図57）のところで述べることにしたい。

「41五月五日」は、賀茂の競馬の場面を描いている（図9～12）。疾走する二頭の馬と樹上の僧については、四本ともよく似た図様であるが、有吉本の挿絵は見開き二頁にわたる通し絵であり、馬を左右の頁に描き分けている。また、前方の馬の前足と騎馬人物の左手にも異同が認められる。埒外の見物人については、「なぐさみ草」と蓬左文庫本は、後者が埒の向こうの右端の子供を欠く以外はほぼ同じである。一方、富美文庫本は埒の手前の右端の人物、及び向こう側の後方の二人とその背後の樹木を欠き、右端の子供の姿態も「なぐさみ草」とは異なっている。しかし、見開き二頁を使っていることからもわかるように、最も異同が大きいのは有吉本であり、埒の手前に十人、向こう側に九人の見物人を描いている。しかも、それらの人々はすべて近世風俗に描き改められており、姿態も他三本とは異なっている。また、埒の端を描くのも有吉本だけであるが、そこにも男が一人立っている。なお、この段では兼好も見物人に交じっており、「なぐさみ草」と蓬左文庫本では、埒の向こう側にいる僧を兼好とみなすことができる。しかし、富美文庫本と有吉本には僧の姿がなく、兼好の存在を無視した図様になっている。

「53是も」は、稚児が法師になる名残に開かれた酒宴で、仁和寺の僧が興にのって足鼎を被って舞う場面を描いている（図13～16）。これも四本ともよく似た図様であるが、蓬左文庫本と有吉本では僧の頭から肝心の足鼎が消え、袖を被る姿になっている。明らかに本文から逸脱した図様であるが、蓬左文庫本では、さらに酒宴の主役であるはずの稚児も消え、手前右側の僧を小姓に描き変えている。また、蓬左文庫本は州浜台を描くが、他三本では酒宴の料理が三宝と重箱で供されている。建物については、隣室が覗けるかどうかで「なぐさみ草」と蓬左文庫本、富美文庫本と有吉本に別れるが、畳の敷き方は富美文庫本は二列で、他三本は三列である。しかし、縁は有吉本のみ榑縁であり、他三本は木口縁である。このように、それぞれに微妙な異同が生じているが、概して言えば蓬左文庫本が最も独自性が強く、有吉本がこれに次ぐようである。

さて、以上四段を見ると「なぐさみ草」以下四本の図様は互いに極めて密接な関係にあり、同一の淵源に列なるものであることは明らかである。しかし、蓬左文庫本、富美文庫本、有吉本は、他本に対してそれぞれ独自性のある表現も有している。繰り返して言えば、蓬左文

庫本については「序つれづれ」の兼好の視線、「18人は」の「なりひさご」、「53是も」の稚児の欠失や州浜台など、富美文庫本については「序つれづれ」の草庵、「41五月五日」の見物人など、有吉本については「18人は」の紅葉、「41五月五日」の見物人などである。これらの点に注目すると、この三本はいずれも他本には先行し得ないと判断される。それに対し「なぐさみ草」の図様は他三本と共通する部分が比較的多く、四本のなかでは最も基幹となりうるものであろう。以上のことから、ここではひとまず蓬左文庫本、富美文庫本及び有吉本は、それぞれ独自に「なぐさみ草」を典拠としたものと考えておきたい。

ここで「105北の屋陰」を見てみよう（図17～20）。この段は、北の屋陰に残る雪が凍るような寒い日の「有明の月さやか」なる頃、「御堂の廊」で男女が「長押に尻掛けて」語らっていたという話である。この「長押」は地長押のことであるが、「なぐさみ草」は廊の向こう側の端に低い側壁を設け、これに腰掛けるように描いている。ところが、蓬左文庫本では側壁と男の腰の位置がずれており、これでは中腰になってしまいそうである。また「なぐさみ草」では、男の膝は両足とも曲がっており、「尻掛けて」いることがよくわかるが、蓬左文庫本ではその点も曖昧な表現になっている。有吉本も同様であり、もはや座っているのか立っているのか判然としない。この二本に比べると富美文庫本は確かに「尻掛けて」いるが、地長押でも側壁でもなく、縁台のようなものに座っている。以上の四本を見比べると「なぐさみ草」の図様が最も自然なものであることがわかり、他三本はこれから派生し、変容していったものと推測される。また、建物は蓬左文庫本、有吉本、富美文庫本の順に変容の度合いが強くなるが、蓬左文庫本は月を欠き、有吉本は画面右下の土坡と雪を欠いていることに注目すると、これら三本の間に転写関係を想定するのはやはり困難である。先述の如く、いずれも他本には先行し得ないと考えるべきであろう。

しかし、既に見てきたように「なぐさみ草」に対する異同の中には、他三本あるいはそのうちの二本にだけ共通するものがあることも確かである。例えば「序つれづれ」で指摘した机の上の料紙に関する異同は他三本に共通するものであり、遠山を描かないのは蓬左文庫本と有吉本に共通する異同である。このような例は、蓬左文庫本、富美文庫本及び有吉本の間にも部分的な影響関係が生じている可能性を窺わせる。次は、この点に注目してみたい。

まず、富美文庫本と有吉本の関係を見てみよう。「137花は盛り」は「花はさかりに、月はくまなきをのみ、見る物かは」で始まる長文の段であるが、「なぐさみ草」と蓬左文庫本は、この冒頭文から桜花と満月、そして草庵で脇息に凭れながらそれらを眺める兼好を描いている（図21～22）。ただし「なぐさみ草」は花も月も画面上方の雲間に描いており、兼好の実際の視界には入っていないのに対し、蓬左文庫本は庭にも桜を描き、月も軒より右側に寄せて、兼好の視線を意識した構成になっている。しかし、いずれにせよ桜と月を眺める場面であることにかわりはない。ところが、本文のいう「月」は仲秋の名月であるから、これは桜を眺める春の場面と月を眺める秋の場面を異時同図的に

合成したものと見なされる。一方、富美文庫本と有吉本は桜花だけを描き、月を描いていない（図23～24）。これは描き落としというよりも、この二本が意図的に春景だけを選択した結果のように思われる。なお、建物についても「なぐさみ草」と蓬左文庫本に共通性があり、富美文庫本と有吉本はそれぞれ少しずつ異同が生じている。

また「141悲田院」では、「なぐさみ草」と蓬左文庫本は建物を斜投影法で描いているが、富美文庫本と有吉本は不等測投影法を用いている。同様のことは「181ふれふれ」についても言える（図25～28）。ただし、ここでは富美文庫本は他本が御簾を描くところを蔀に描きかえているので、この点では有吉本は「なぐさみ草」及び蓬左文庫本の方に近似する。しかし、蔀を上下に描き分けているのは富美文庫本と有吉本だけである。富美文庫本と有吉本に見られるこのような共通性は、両者の図様に何らかの繋がりがあることを示唆するように思われる。

次に、蓬左文庫本と有吉本については、先述の「序つれづれ」の遠山の省略や「53是も」の足鼎の欠失が注目される。一方、富美文庫本と蓬左文庫本については、共通する異同はほとんど見あたらないが、強いて言えば「99堀川相国」が挙げられる（図29～32）。「なぐさみ草」と有吉本は画面左上に廊か縁のような建物の一部を描いているが、富美文庫本と蓬左文庫本はこれを欠いているのである。しかし、富美文庫本は屋根を檜皮葺とし、画面左下の二棟の屋根を欠くなど独自の変容を示していることを考慮すると、蓬左文庫本との間に関連を想定するのは難しいように思われる。したがって影響関係を想定し得るのは、ここでは富美文庫本と有吉本、蓬左文庫本と有吉本の間だけであるが、三本共通の段には、富美文庫本と蓬左文庫本に共通する異同が見られるものがある。これについては、後述する。

さて、四本を比較した結果は右の通りであるが、ついでに言えば、富美文庫本については、特に建物に関する独自の異同が多いことに気づく。「序つれづれ」（図3）のような一部変更は十五段に、また「105北の屋陰」（図19）のような建物の一部省略は七段に見られる（表3参照）。この傾向は次の三本共通の段においても同様であり、富美文庫本全体にわたる特徴と言える。

また、有吉本も独自の異同が極めて多いが、こちらは建物や樹木を描き加えるなど、総じて華やかになる傾向がある。[16] 先述の霞の装飾的な表現もこれを増長する。特に四十八図のうち六図が見開きの通し絵である点が注目されるが、そこでは「41五月五日」のように「なぐさみ草」の図様を引き伸ばし、人物を増やすなどの工夫がなされている。また「171貝を」では、左頁の貝合に興じる五人の女房たちは他三本とほぼ同じ図様であるが、右頁には全く別の図様が描き加えられている（図33～36）。そこでは女房三人の艶やかな立姿と庭の松梅が相俟って、一際華やかな画面が構成されている。なお、図様の追加に伴い左頁の建物にも変更が生じているが、富美文庫本はこれを反転したような構図である点も注目される。

表３「徒然草」挿絵の異同（四本共通の段）

章段	本文冒頭	蓬左文庫本	富美文庫本	有吉本
序	つれづれ	1 前方を見る、文字有、遠山無	1 建物一部変更※・省略、文字有	1 文字有、遠山無
8	世の人の	7	5 桶移動、樹木一部省略	4 柳に変更、遠山無
18	人は	14 ひさご無	9 建物一部変更	6 水に手が届かない、紅葉
22	何事も	19	11 建物一部変更（御簾を蔀に）	7 稚児を大人に
41	五月五日	35 1人減	15 3人減（僧無）	⑩ 11人増（近世風俗、僧無）
45	公世の	39	16 建物一部省略	11 頭に被り物、杖なし
53	是も	46 稚児無、鼎無、州浜台	21 建物一部変更	13 鼎無、建物一部変更
59	大事を	48	23 建物一部変更	14 人物一部異同
66	岡本関白	52	25 建物一部変更	15
87	下部に酒	62 1人減	32 遠山無	⑱ 2人増、遠山無
90	大納言	64	33 稚児移動	19
99	堀川相国	70 建物一部省略	38 建物一部省略	21
105	北の屋陰	76 月無	41 建物一部変更・省略	22 雪無
114	今出川の	81 遠山無	44 1人減	24 柳有、遠山無
128	雅房	89	48 建物一部省略、土坡・樹木有	26 建物一部変更※、松有
134	高倉院の	91	49 建物一部変更※	27 僧左右反転、棕櫚有
137	花は盛り	93 庭に桜有	50 月無	28 月無、建物一部変更
141	悲田院	96	51 建物一部変更※	29 建物一部変更※・省略
144	栂の尾の	97	52 松無	30
162	遍照寺の	104 1人減	54 建物一部省略	33 塀と松有
171	貝を	105	55 建物一部変更	㉞ 3人増、建物一部変更、松梅有
173	小野小町	106	56	35 杖無
175	世には	107	57 松無	36 樹木変更
181	ふれふれ	111	59 建物一部変更※	38 建物一部変更※
195	ある人	119	63 刀無、松移動、田一部変更	40 田一部変更
206	徳大寺	122 松無	65 建物一部変更	42 建物一部変更、松無
218	狐は人に	129	69 建物一部変更・省略	44 刀を振り上げる、建物一部変更、塀有
225	多久資が	132	71 左手を伸ばす、建物一部変更	45 建物一部変更
240	しのぶの	140	75 建物一部変更	48 建物一部変更※

・「なぐさみ草」に対する異同のうち主要なものを記した。
・各作品欄の数字は作品ごとに付した挿絵の通し番号である。
・※は不等測投影法と斜投影法の異同を示す。

（二）三本共通の段

富美文庫本の挿絵七十五段のうち「なぐさみ草」及び蓬左文庫本と共通するものは四十段である（表４）。ここでは、その中から特に注目されるものを幾つか取り上げることにしたい。

まず「なぐさみ草」に対し、富美文庫本と蓬左文庫本に共通する異同がある段を見てみよう。「33今の内裏」は、新内裏を御覧になった玄輝門院が「櫛形の穴」の形の誤りを指摘したという話である。「櫛形の穴」は清涼殿の母屋と殿上の間の間の壁に設けられた連子窓のことであり、「丸く縁もな」かったものが、「葉の入りて、木にて縁をした」ものになっていたというのである。「なぐさみ草」は院が誤った形の窓を指さしているところを描いているが、富美文庫本と蓬左文庫本の壁には襖絵のような文様が描かれるだけで、肝心の窓が見あたらない（図37～39）。後の二本が本文から逸脱した図様であることは明らかであり、ここでも

「なぐさみ草」の図様の正当性、ひいては先行性が立証されるが、それとともに他二本が「逸脱した図様」を共有している点に注目しておきたい。

また「101ある人」では、「なぐさみ草」の建物は不等測投影法で描かれているが、他二本では斜投影法が用いられている。右の二例は、富美文庫本と蓬左文庫本の間に図様上の何らかの繋がりがあることを示唆するもののように思われる。

ところで、右の二例では、蓬左文庫本は問題とした点以外は「なぐさみ草」とほぼ同じ図様であるが、富美文庫本は他にも多くの異同が生じている。「33今の内裏」では部屋が狭くなり、そのため院が指さす先が壁から外れてしまっているし、画面右下の屋根も省略されている。「101ある人」でも画面右下の門が省略され、かわりに樹木が描か

表４　「徒然草」挿絵の異同（三本共通の段）

章段	本文冒頭	蓬左文庫本	富美文庫本
2	いにしへ	3	2　建物一部変更
6	我身の	6　1人増、墓石に変更	4　牛車移動
11	神無月の	10　実有	6　建物一部変更、岩無
14	和歌こそ	12　女に皺有、脚絆無	8　杖有、柴垣移動、棚・桶無
19-1	折節の	15　1人減	10　女を男に、鶯無
23	おとろへ	20　1人減	12　1人減、建物一部変更
27	御国譲り	23	13　落花無、建物一部変更・省略
33	今の内裏	28　窓無	14　窓無、建物一部変更・省略
48	みつちか	41	17　建物一部省略
49	老きたり	45	18　18建物一部変更・省略
51	亀山殿の	44　水車に不備有	19
52	仁和寺に	45	20　建物一部変更※・省略
54	御室に	47　1人減	22
61	御産の時	50	24　建物一部省略、風景有
67	賀茂の	53	26　建物一部省略
69	書写の	55	27　荷無
80	人ごとに	59	30　建物一部変更
86	惟継	61	31　建物一部変更・省略
92	ある人	65	34
93	牛をうる	66	35　建物一部省略
95	箱の	68	36　建物一部変更
96	めなもみ	69	
101	ある人	72　建物一部変更※	39　建物一部変更※・省略
102	尹大納言	73	40　建物一部省略
106	高野の	77　脚絆無	42　脚絆無
109	高名の	79　79木のぼり男振り向く	43　木のぼり男の顔が見える
119	鎌倉の海	84	45　岸と草有
121	やしなひ	86	46　建物一部変更・省略
124	是法法師	87　僧左右反転、草庵に変更	47　47建物一部変更
152	西大寺	99	53　建物一部省略
180	左義長	110	58　建物一部変更
183	人つく牛	112	60　犬が座る
188	ある者子	115	61　建物一部省略
191	夜に入て	117	62　建物一部変更※
209	人の田を	124	66　田一部変更
214	想夫恋	126	67
216	最明寺	128　建物一部変更	68　建物一部省略
227	六時礼讃	133	72　1人減
231	園の別当	135	73　建物一部変更
237	やない箱	138	74　建物一部変更

・「なぐさみ草」に対する異同にうち主要なものを記した。
・各作品欄の数字は作品ごとに付した挿絵の通し番号である。
・※は不等測投影法と斜投影法の異同を示す。

表５　「徒然草」挿絵の異同（二本共通の段）

章段	本文冒頭	富美文庫本
4	後の世の	3　数珠なし、建物一部変更、樹木一部省略
13	ひとり灯	7　建物一部省略（竹の縁）
73	世に語り	28　雪なし
79	何事にも	29　土坡・樹木を加える
203	勅勘の所	64　建物一部変更
221	健治弘安	70　樹木一部省略

・「なぐさみ草」に対する異同にうち主要なものを記した。
・各作品欄の数字は作品ごとに付した挿絵の通し番号である。

れている。このような建物の一部変更あるいは省略は、三本共通の段でも散見され、一部変更は十七段に認められる（表4参照）。例えば「27御国譲り」では御簾や蔀、高欄の表現に異同が生じる程度であるが（図40～42）、「52仁和寺の」では斜投影法の建物を不等測投影法に描きかえ、「191夜に入て」ではその逆を行っている。また「86惟継」では吹抜屋台を屋根のある建物に描きかえているが、そのため建物の奥が見えなくなり、却ってすっきりしたように見える（図43～45）。さらに「237やない箱」では、人物の配置はほぼ同じであるにもかかわらず、建物の構造は大幅に変更されている（図46～48）。一方、建物の一部省略は十五段に見られる。例えば「93牛を売る」や「102尹大納言」では背後の建物が、「152西大寺」や「188ある者子」では塀の中の建物が、「216最明寺入道」では門と塀が省略されている。なお、先述の「27御国譲り」では画面上方に遠景として描かれていた屋根が、「86惟継」では画面右下の門が省略されているが、このように一図の中で変更と省略の両方が行われている段も多い。

次に、人物に関する異同では「23おとろへ」が注目される（図49～51）。ここには、御所で儀式が行われている間に「諸司の下人ども」が「したり顔に馴れたる」様子で待っている場面が描かれている。「なぐさみ草」と蓬左文庫本はよく似た図様であるが、後者では榻にもたれて眠る稚児が一人欠けている。富美文庫本では、この稚児は描かれているが、かわりに牛車の前の二人が消え、沓の傍らに座る二人の男も姿形の異なる一人に変更されている。なお、富美文庫本はここでも建物の異同が目立ち、画面上方は全く別の図様になり、画面右下の門も消えて塀だけになっている。

本文との関係で注目されるのは、先にも挙げた「27御国譲り」である（図40～42）。この段は、新帝の御代になり、新院の御所の庭は掃き清める人もいなくて桜花が散り敷いているという話である。「なぐさみ草」と蓬左文庫本は、後者が上蔀を欠く以外はよく似た図様であり、庭には落花が描かれている。ところが、富美文庫本の庭には落花はなく、本文を無視した図様になっている。先述の「41五月五日」における僧の欠如とともに、富美文庫本の性格を考える上で注目される表現である。

最後に、蓬左文庫本に独自の異同が見られる例を見ておこう。「6我身の」は子孫がないことをよしとするという話であるが、「なぐさみ草」と富美文庫本はこれとは関係なく五輪塔を拝する男を描いている（図52・54）。ところが、蓬左文庫本は五輪塔を墓石にかえ、その傍らに男を一人描き添えている（図53）。本文中にある「聖徳太子の御墓」から連想したものと思われるが、大胆な変容である。なお、富美文庫本では牛車の位置が左に移動し、人物にも変化が生じている。

また「124是法法師」は、是法の「明暮念仏して、安らかに世を過ぐす有様」が理想的だという話であり、室内で念仏を唱える是法の姿を描いている。「なぐさみ草」と富美文庫本はよく似た図様であり、前者が瓦葺、後者が檜皮葺という相違はあるものの、ともに立派な建物の中で念仏する是法を描いている。ところが、蓬左文庫本では質素な

草庵になり、是法自身も左右反転している。蓬左文庫本は、富美文庫本や有吉本に比べると「なぐさみ草」に対する異同が少ないように思われるが、このように顕著な例もあることに注目しておきたい。

(三) 二本共通の段

富美文庫本の挿絵七十五段のうち「なぐさみ草」とのみ共通するものは六段である（表5）。ここでは「4後の世の」「73世に語り」及び「79何事も」を見ることにしたい。

「4後の世の」は「後の世のこと心にわすれず、仏の道うとからぬ、心にくし」が全文であり、挿絵には仏道に精進する様ということで、寺院に詣でる男が描かれている（図55・56）。建物の異同はさておき、ここでは男の右手に注目してみよう。「なぐさみ草」では長い数珠を持っているのに対し、富美文庫本では何も持っていない。文意からは「なぐさみ草」の図様の方が適切であり、これは富美文庫本の描き落としと思われる。

「73世に語り」は空言についての所見を述べる段であるが、「なぐさみ草」は本文には言及のない雪の積もった芭蕉を描いている（図57）。雪の表現については「18人は」（図5）で述べたが、それが最もよくわかるのは「31雪の面白」（図59）である。この段は、雪の降った朝、人の許に文を送るという話であり、画面には文を手にした使いの稚児が描かれている。その足元は版面を完全に削り取った空白で雪の白さを表しているが、背後の松竹は周囲をわずかに白くするだけで、後はまるで彫り忘れたかのような墨面に埋もれている。しかし、前述の如くこれを外隈と見なせば、松竹にも、また背後の遠山にも雪が積もっていることがわかる。「73世に語り」の芭蕉の周囲の墨面も同様の表現である。

では「なぐさみ草」は雪の積もった芭蕉で何を表そうとしたのであろうか。本文とは無関係のように見えるこの場面を正確に読み解いたのは島内裕子氏である。[17] 島内氏は斎宮歴史博物館蔵「徒然草図」についての言及の中で、西野春雄氏が謡曲『芭蕉』の「雪のうちの芭蕉の、偽れる姿と聞えしは」という一節に「唐の詩人・画家の王摩詰が画材の季節に拘泥せず雪中の芭蕉を描いた故事から、誠ならぬ事の譬え」[18]という脚注を付していることに注目し、この場面を本文冒頭の「世に語り伝ふること、まことはあいなきにや、多くは皆虚言なり」の絵画化であると指摘した。その解釈は誠に慧眼であったが、肝心の「なぐさみ草」の絵については「ただしその図柄をみただけではこの植物を芭蕉と特定するのは難しく、雪も描かれていない」と述べており、これが芭蕉であることに懐疑的である。さらに雪の表現については全く理解していない。そのうえで斎宮歴史博物館本が「芭蕉の葉にも地面にも、雪が降り積もっている」さまを描いているのを「『なぐさみ草』の挿絵を使いながらも独自の工夫を凝らしている例」であると述べているが、この点については、むしろ斎宮歴史博物館本は「なぐさみ草」を正確に写していると言うべきであろう。

なお「雪中芭蕉」について少し補足すると、これは『夢渓筆談』に収録される王維（摩詰）の故事を出典とする。[19] 唐の張彦遠が、王維は

四時を問わず桃・杏・芙蓉・蓮花を一図に描くといい、自分が所蔵する「袁安臥雪図」には「雪中芭蕉」が描かれているが、これは王維が「心に得て、手に応じて」描いたものであると評したという話である。そこには「空言」の意味はないが、本来は熱帯地方の植物である芭蕉と雪の取り合わせが、いつしか「誠ならぬ事の譬え」とされるようになったのであろう。なお「雪中芭蕉」は日本でも実際に画題として取り入れられており、少し下るが『墨水画塵』にも取り上げられている。[20]

さて、本題に戻って富美文庫本を見ると、「なぐさみ草」とほぼ同形の芭蕉が描かれているが、葉は青々と茂り、雪は積もっていない。したがって、富美文庫本の絵師も「なぐさみ草」の雪の表現を理解していなかったということがわかる。

最後に「79何事も」は、何事にも出しゃばらないのがよいという話である。両本とも挿絵には「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿を描いているが、これは本文の最後に「かならず口重く、問はぬ限りは言はぬこそいみじけれ」とあるのから連想したものであろう（図60・61）。猿の図様はよく似ているが、「なぐさみ草」は画面の上下に雲霞を表すだけで一切の背景を捨象しているのに対し、富美文庫本は猿の後方に土坡と樹木を描き添えている。「なぐさみ草」が現実から切り離された非日常的な世界を感じさせるのに対し、富美文庫本は三猿を自然の風景の中で捉えていると言えるだろう。建物に関しては一部を省略することの多い富美文庫本が、ここでは逆に風景を描き加えているのが珍しく思われる。

（四）比較結果

さて、以上のことから、「なぐさみ草」、蓬左文庫本、富美文庫本及び有吉本の挿絵については、互いに極めて密接な関係があり、いずれも同一の淵源に列なるものであることは明らかである。そして、この四本の中では「なぐさみ草」の図様に最も先行性が認められることから、他の三本はこれを典拠としたものであると推測するに至った。この結果は「なぐさみ草」の刊行年が慶安五年（一六五二）であること、及び蓬左文庫本が新君（一六五四―九二）の蔵書として伝来したことも年代的に矛盾するものではない。また、蓬左文庫本、富美文庫本及び有吉本については、それぞれが独自の異同をもつことから、一方的な転写関係は想定し得ないと判断した。しかし、一部には相互に共通する表現があることから、部分的な影響関係が生じている可能性があると思われる。

最後に、奈良絵本三本の特徴を簡単に見ておきたい。表3・4からもわかるように、三本の中で「なぐさみ草」の図様に最も忠実なのは蓬左文庫本である。しかし「序つれづれ」の兼好の視線（図2）、「6我身の」の墓（図53）、「124是法法師」の草庵など、単独の異同は極めて独自性の強いものになっており、その落差の大きさが興味深く思われる。なお、中野氏は蓬左文庫本が「なぐさみ草」に先行する可能性を示唆されているが、[21]そう考えるのは無理である。

逆に、三本の中で最も異同が大きいのは有吉本である。通し絵六図における図様の増殖はもとより、他の段でも建物や樹木を描き加える

ことが多い。[22] また「18人は」では、本文の季節を無視してまで紅葉を描いている（図8）。人物については「218狐は人に」の表現が注目される。夜、三匹の狐に襲われた下法師が「刀を抜きてこれを防ぐ」という場面が描かれているが、他三本はいずれも刀を下に構えているのに対し、有吉本は頭上に振りかざしており、派手な立ち回りをしているように見える。このように有吉本は「なぐさみ草」の図様を基調としながらも、建物や周囲の風景、あるいは人物の表現に何らかの手を加えており、一工夫凝らした作品であると言えるだろう。

富美文庫本も異同の多い作品であり、特に建物については変更や省略が多い。概して画面を簡素化する傾向があるが、その分、画面はすっきりした感じになっている。本文との関係では、「27御国譲り」の落花、「33今の内裏」の窓、「41五月五日」の僧（兼好）及び「73世に語り」の雪などで指摘したように、文意を理解していないと思われる表現が見られるのが注目される。同じことは蓬左文庫本や有吉本にも認められるが、これも「なぐさみ草」より後のものであることを窺わせる要素の一つである。

結語

本稿では、富美文庫本の挿絵の図様を「なぐさみ草」、蓬左文庫本及び有吉本と比較し、これら四本の中では「なぐさみ草」の図様に最も先行性があること、他三本はそれぞれ独自にこれを典拠としていること、ただし部分的には相互に影響関係が生じている可能性があることを明らかにした。奈良絵本三本については、それぞれの特徴にも簡単に言及したが、富美文庫本を中心としたため、これに描かれていない段については述べることができなかった。それらについては、本稿では取り上げなかった作品も含め、改めて検討する機会を持ちたい。また「なぐさみ草」についても興味深い点は多々あり、特に「73世に語り」や「79何事も」のような機知的な場面選定が面白く思われる。今後は、このような場面選定の問題とともに図様の淵源なども総合的に考察する必要があるだろう。

さて、富美文庫本は、現存する奈良絵本「徒然草」の中では蓬左文庫本に次ぐ七十五図という多数の挿図を有する点で極めて貴重な作品である。「なぐさみ草」に対する異同が多いことは既述の通りであるが、これも却ってその希少価値を高めるものと言えるだろう。なお、本稿では図様の比較にのみ終始し、絵画様式など他の問題に言及する余裕がなかったが、それらの点は今後の課題としたい。

（注）

（1）「なぐさみ草」八冊は松永貞徳（一五七一―一六五三）の講釈をもとに成立した「徒然草」の注釈書であり、慶安五年（一六五二）に刊行された。日本古典文学会編『日本古典文学影印叢刊28・29　なぐさみ草上・下』（貴重本刊行会、一九八四年十一月）所収。

（2）中野雅之「徒然草の世界」『特別展図録　兼好と徒然草』神奈川県立金沢

文庫、一九九四年九月、一〇〇―一〇一頁。齋藤彰「徒然草版本の挿絵史（一）」『学苑・日本文学紀要』七三八号、二〇〇二年一月、二頁。

（3）これまでに富美文庫本に言及したものは次の一点だけである。塩出貴美子・中部義隆・宮崎もも『江戸時代の絵入本及び絵巻の調査研究―新出コレクションの調査を中心として―（平成十九―二十年度科学研究費基盤研究（C）成果報告書）』二〇〇九年三月。

（4）注3掲載書、塩出論文参照。

（5）弘文荘編『弘文荘待賈古書目：for Windows 95/98』（CD-ROM版）八木書店、一九九八年。

（6）注2掲載書。

（7）齋藤彰「徒然草版本の挿絵史（一）～（十三）」『学苑・日本文学紀要』七三八号から七六九号までのうち十三号に掲載、二〇〇二年一月～二〇〇四年十一月。

（8）島内裕子、1「描かれた徒然草」、2「徒然草屏風の研究―『熱田屏風』と『上杉屏風』―」、3「新出資料『徒然草淡彩色紙』（全二十九葉）の紹介と研究」、4「東京藝術大学美術館蔵『徒然草絵巻』（全五十三図）の紹介と研究」『放送大学研究年報』二十二～二十五号、二〇〇四～〇七年。

（9）有吉保編著『徒然草　詳密彩色大和絵本上・下』勉誠出版、二〇〇六年六月。本作品については、注8掲載島内論文3が「有吉本」と呼称しているので、これに従う。

（10）注2掲載書。

（11）工藤早弓『奈良絵本・下』紫紅社　二〇〇六年十月。

（12）『青山短期大学所蔵品図録　第一輯』（大阪青山短期大学、一九九二年十月）掲載、図版番号191。作品解説には「江戸時代初～中期頃になる『徒然草』の縦型奈良絵本の詞書三十四枚、挿絵三十八枚を、箔押台紙に貼りつけた屏風。」とある。

（13）『蓬左文庫　歴史と蔵書』名古屋市蓬左文庫、二〇〇四年十一月、二〇頁。

（14）注2掲載中野論文、一〇一頁。

（15）注2掲載齋藤論文、二頁。

（16）建物を描き加える例には「162遍照寺の」や「218狐は人に」があり、また樹木を描き加える例には「114今出川の」の柳、「134高倉院の」の棕櫚、「162遍照寺」の松などがある。

（17）注8掲載島内論文1、一二八（一九）―一二七（二〇）頁。

（18）西野春雄『新日本古典文学大系57　謡曲百番』岩波書店、一九九八年三月、二〇八頁。

（19）『夢渓筆談』は宋の沈括（一〇三一―九五）の晩年の随筆である。その巻十七の二葉表に「如彦遠畫評言、王維画物、多不問四時。如画花、往往以桃・杏・芙蓉・蓮花、同画一景。予家所蔵、摩詰画袁安臥雪図、有雪中芭蕉。此乃得心応手、意到便成。故造理入神、廻得天意。此難可與俗人論也。」とある（句読点は塩出による）。宋沈括撰『元刊夢渓筆談』文物出版社、一九七五年。

（20）『墨水畫塵』は上杉墨水による画題解説書で、天保二年（一八三一）に刊行された。その中に「雪中芭蕉」の項目があり、そこに「筆談云、唐王維畫物多不問四時、如畫花往往以桃杏芙蓉蓮花同畫一景、畫袁安収雪圖有雪中芭蕉云々。和漢雪中芭蕉を畫くはここに基づくならん。」とある。坂崎旦編『日本絵画論大系Ⅴ』名所普及会、一九八〇年、三七〇頁。

（21）注2中野論文、一〇一頁。

（22）注16参照。

（付記）

本稿は平成二十一年度奈良大学研究助成「江戸時代の絵入本及び絵巻の研究―個人蔵コレクションを中心に―」による研究成果の一部である。本稿をなすにあたり、富美文庫本所蔵者、名古屋市蓬左文庫、日本大学名誉教授有吉保氏、勉誠出版の御高配を賜った。記して謝意を表する。なお、本稿に掲載した図版は、富美文庫本は平成十九―二十年度科学研究費基盤研究（C）「江戸時代の絵入本及び絵巻の調査研究―新出コレクションの調査を中心として―」（研究代表者　塩出貴美子）で撮影したものを、蓬左文庫本は名古屋市蓬左文庫所有の原板からデュープしたものを、有吉本は注9掲載書から複写したものを、「なぐさみ草」は架蔵本を撮影したものを使用した。

図２　序つれづれ 蓬左文庫本１

図１　序つれづれ「なぐさみ草」1

図４　序つれづれ 有吉本１

図３　序つれづれ 富美文庫本１

図7　18人は 富美文庫本9

図6　18人は 蓬左文庫本14

図5　18人は「なぐさみ草」19

図9　41五月五日
「なぐさみ草」41

図10　41五月五日 蓬左文庫本35

図8　18人は 有吉本6

図12　41五月五日 有吉本10

図11　41五月五日 富美文庫本15

図 15　53 是も 富美文庫本 21

図 14　53 是も 蓬左文庫本 46

図 13　53 是も「なぐさみ草」52

図 17　105 北の屋陰
「なぐさみ草」85

図 16　53 是も 有吉本 13

図 20　105 北の屋陰 有吉本 22

図 19　105 北の屋陰 富美文庫本 41

図 18　105 北の屋陰 蓬左文庫本 76

図 21　137 花は盛り
「なぐさみ草」103

図 23　137 花は盛り 富美文庫本 50　図 22　137 花は盛り 蓬左文庫本 93

図 25　181 ふれふれ
「なぐさみ草」121

図 24　137 花は盛り 有吉本 28

図 28　181 ふれふれ 有吉本 38　図 27 181 ふれふれ 富美文庫本 59　図 26 181 ふれふれ 蓬左文庫本 111

図 29　99 堀川相國
「なぐさみ草」79

図 31　99 堀川相國 富美文庫本 38　　図 30　99 堀川相國 蓬左文庫本 70

図 34　171 貝を 蓬左文庫本 105　　図 33　171 貝を「なぐさみ草」115　　図 32　99 堀川相國 有吉本 21

図 36　99 貝を 有吉本 34　　図 35　171 貝を 富美文庫本 55

図 37　33 今の内裏
「なぐさみ草」34

図 39　33 今の内裏 富美文庫本 14　図 38　33 今の内裏 蓬左文庫本 28

図 40　27 御国譲り
「なぐさみ草」29

図 42　27 御国譲り 富美文庫本 13　図 41　27 御国譲り蓬左文庫本 23

図 45　86 維継 富美文庫本 31　図 44　86 維継 蓬左文庫本 61　図 43　86 維継「なぐさみ草」70

図 48 237 やない箱 富美文庫本 74　図 47 237 やない箱 蓬左文庫本 138　図 46　237 やない箱「なぐさみ草」153

図 51　23 おとろへ 富美文庫本 12　図 50　23 おとろへ 蓬左文庫本 20　図 49　23 おとろへ「なぐさみ草」25

図 54　6 我身の 富美文庫本 4　図 53　6 我身の 蓬左文庫本 6　図 52　6 我身の「なぐさみ草」7

図 55　4 後の世の
「なぐさみ草」5

図 56　4 後の世の 富美文庫本 3

図 57　73 世に語り
「なぐさみ草」64

図 58　73 世に語り 富美文庫本 28

図 59　31 雪の「なぐさみ草」32

図 60　79 何事にも
「なぐさみ草」66

図 61　79 何事にも 富美文庫本 29

On **Tsurezuregusa**（Essays in Idleness）in **Fumi** Library: The comparison of the illustrations with other works

Kimiko SHIODE

Tsurezuregusa（Essays in Idleness）in **Fumi** Library, consisting of five volumes, is an illustrated manuscript called by the name of **Nara-ehon**（a type of illustrated narrative book or scroll consisting mainly of short folk tales）. The text leads from **Karasuma-bon**, one of the relatively authentic texts. Each volume includes fifteen illustrations, so there are seventy-five in all, which is the second largest number among the versions in **Nara-ehon**s known at present, next to **Hosa** library version.

This resume presents the outline of **Fumi** Library version first, then compares its illustrations with those of three other works: **Nagusamigusa**, a commentary of Tsurezuregusa published in 1652 ; **Hosa** library version ; and another version presented by Mr. Tamotsu Ariyoshi in 2006. This comparison will lead you to the conclusion as follows:

The illustrations of **Nagusamigusa** precede those of the three other works. That is, **Nagusamigusa** is the source of the others. But you cannot suppose a direct transcription relationship between them because each work has its own character. Regarding the respective characteristics of the works, a few indications are shown.